
まおうが家にやって来た！

煉獄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まあうが家にやつて來た！

【Zコード】

N3125D

【作者名】

煉獄

【あらすじ】

時は平成。世界中のあらゆる事象が科学で証明されている時代。そんな世の中に、こんなオカルトがあるなんて。平穏な俺の日常を返してくれ

BY大杉隼

(前書き)

唐突に思いついた魔法少女……ではなく魔王少女モノ。
かる~いノリで楽しんでいただければ幸いです。

「魔王が家にやつて來た！」

締め切られたカーテン、髑髏の裝飾が施された不氣味な燭台。それに付けられた沢山の蠅燭によつてぼんやりと照らされた床には、怪しく光る魔法陣が。

どうやら、家の居間に続いているはずの扉は異世界へと繋がつてしまつたらしく。

「……iji、dijo」

「うーん、確かに俺の家のはずだ。鍵も合つたわけだし。

「何言つてんの兄さん。居間に決まつてるじゃない」

いつの間にか（正確には初めから）隣にいた妹の俺が呆れたように言つた。

……この状況に呆れているのは俺だが。

「まあ、常識的に考えればそつなるはずだが、ijiは俺の知る我が家じゃねえ」

少なくとも、今朝家を出るまではじく普通の部屋だった筈ですが。

「一体全体なにをやつてるのかな？ うちの馬鹿妹は？」

「さつちやん、塩持つてきたよ。……あ、隼さん、お邪魔してます」

妙に間延びした声が聞こえたかと思つと、台所の扉から塩を持った女の子が出てきた。確か、僕の友人の恵美ちゃんだったな。……ああ、これで謎は解けた。

「……君か、この不気味なセットを持ってきたのは」

「えへへ……ごめんなさい」

恵美ちゃんは機械会社社長の娘なのだ。うちに転がつて大抵の変なものは彼女が購入してうちへ持ち込んだものだ。……頼むか

ら持つて帰つてくれ、押入れのガラクタ。

つか、えへへじゃないよ。この部屋片付けんのどつせ俺になるんだろうし。

「ていうか、一体何やつてんだよ?」

「何つてえつと……おまま」と

めんどくさそうに本から顔を上げた我が妹は、適当な事を言つて誤魔化すつもりらしい。

「んな訳あるかっ! どう見ても悪魔召喚か何かの儀式だろ! いかにも何かを呼び出しますって感じの怪しげな魔法陣。どこをどう見ればおまま」とに見えるのか。

「失礼ね! 悪魔召喚なんて下らない事、このあたしがするわけ無いじゃない」

最近オカルト系の本ばかり読んでる奴が何を言つ。

……それ以前にこのセット見て他に何想像しろってんだ!

「安心してください、悪魔召喚じゃなくて魔王召喚の儀式です」横で見ていた恵美ちゃんは、一ツコリと微笑んだ。何だ、そんな事だったのか。

「そうか、それなら安心……できねえよ! 余計に悪いわつ!」

よく見れば僕の手にはタイトルが掠れて読めない本が握られていた。

それを取り上げて数ページめぐると、意味の分からない文字が並べられている。

所々に前の持ち主のものらしき日本語のメモが残っているが、それも字が汚くて読めん。更に床には【一時間で出来る! 簡単魔王召喚の手引き】の本が落ちている。

「第一、こんな嘘臭い本に頼つてやつて出来るわけ無いだろ

「いえ、隼さんが今持つてる本はどうも本物っぽいんですよ。でもよく分からない言語で書かれてる上にメモも所々掠れて読めないからそっちの手引きを参考にしながらやつてるんですよ。結構解読に時間がかかりましたよ」

うん、確かにやり方は賢いのかもしれないけど、やつてゐ事はおかしい！

「……で、その塩は何に使つの？」

さつきから恵美ちゃんが持つてゐる塩も何か意味があるのだろうか？
「お、忘れてた。それ撒いて、部屋清めるの。そうしないと儀式の
最中に悪いものが入つて来るらしいのよ。…………さてと、後は【処女
の生き血】を加えて完成ね」

これは、止めるべきなのか？　いや、偉はとにかくやらないと気が済まない性質だし、失敗して諦めるのを待つか。科学が全ての今の中、魔王の召喚なんてオカルトチックな出来事が起こるはずは無い。ビバ、科学！

ホツと一息ついて見ていると、僕はナイフで自分の
彼女は滲み出た血液を床の魔法陣へと垂らす……刹那。

「…………！」と金属的な音が聞こえたかと思ひて魔法陣が一瞬ブレたように見えた。それと同時に光とモヤが魔法陣から吹き出してくる。

それにより消える蠅燭。
走つたが。
な、なんかゾクゾクと全身に寒気が

「アーティストは、」

「わあ、凄いじゃないですか！」

俺が素气回避していた次の瞬間、魔法陣を中心とする衝撃波が迸つた！

「電卓」

咄嗟に持っていた本を捨て、俺と恵美ちゃんを魔法陣から引き剥がすと俺自身も離れる。

「やつた、成功したのねー。」「喜んでる場合かつー！」

二人を背中に庇いながら、注意深く部屋を見つめる。

徐々に晴れ行くモヤ……その中には、さつきまで見えなかつた人

影が見えた。

「……お、お前は？」

人影は予想外に小さい。暗がりでも分かるが、俺よりも頭一つ分は低い身長に似合わぬ長いマントで全身を覆つていて、顔の下半分もマントで隠している。

……それでも、その全身から滲み出る威圧感は凄まじい。

「ふふふつ……汝か、妻わいわいを呼んだのは。妻の名はシトリ。さあ、汝も名を名乗れ」

不意に、その人影が声を発した。その声は、俺の予想とは違った割と幼かった。

しかし、油断できない事は雰囲気で分かる。

流石の俺も震えているようだった。

「つうつ……寒い。お兄ちゃん、ちゃんと戸閉めた？」

「そこにつ！？ ただ寒さに震えてたわけ！？」

俺の囮太さには脱帽してしまう。恵美ちゃんの方は本当に恐怖で震えているようだった。

「随分と賑やかな人間ね……。さあ、名乗りなさい」

暗闇の中、魔王は俺たちに向けて静かに言った。一言一言に、強い威圧感を感じる。

シトリといえば、七十の軍を従える魔界の王族。……つまり本当に魔王という訳だ。

女の秘密を暴き、その女を笑いものにして喜ぶという、恐ろしい魔族。

本物かもしれないそれが目の前にいる。それだけで、俺の声は震えた。

「お、俺は隼だ。……大杉 隼」

ゆっくり、ゆっくりと俺の方へと歩み寄る魔王。恵美ちゃんが息を飲むのが分かつた。

魔王が一步近寄る度に、ぞくりと背筋が凍つた。一步、また一步。

と、長いマントが彼女の足元へはらりと落ちる。丁度その上に

魔王の次の足が乗るのが見えた。

「そう、隼。では、汝の願いを……きやわつー？」

黄色い悲鳴が、部屋に響き渡る。さつきとは違った意味で、空気が凍る。

一瞬、何が起きたのか分からなかつた。もしかして……転んだ？ 魔王が？

しかも妙にかわいらしい悲鳴だつた。本当に魔王なのかコイツ？

「あいたたた……」

自称魔王はどうも顔面から着地したようで、鼻を擦つていた。そして、顔の半分を覆つていたマントを持つ腕も離れた為、彼女の顔が顕になつた。

「…………子供？」

「思つたより若いわね」

「みたいですね」

「どう上に見積もつても歳は十六、七辺りじゃないだろ？」

「なんか今までの動搖が馬鹿らしくなつてきた。」

「どうせこいつは僕の友達で、俺へのドッキリだつたんだな。納得。」

「こ、子供言うなー。これでもあなたの十倍は軽く生きてるんだからねー！」

そう言つて少女はがつと顔を上げて反論した。結構可愛いな。まあ、何事も無くて良かつた。君、そろそろ遅いんだし帰りなさい。恵美ちゃんも

「…………っ！」

時刻は七時。そろそろ帰つてもらわないと夕飯の支度が出来ない。

「そうですね。もう遅いですし」

何事も無かつたかのように帰り支度を始める恵美ちゃん。

「あたしも数学の宿題しなきやね。あ、片付けお願ひねお兄ちゃんおじおじ……夕飯の支度があるんだつーの。」

そう思いつつも、片付けを開始する俺つて甘い？

「……………」

「気付けば、啞然としながら俺を見つめる自称魔王。何か用でもあるんだろうか？」

「あれ、まだ帰らないのか？ あんまり遅くなると」両親が心配するよ」

さつきの子はいつのままでいた。思い切り拳を握りながら。

「あんた達」

拳をわなわなと震わせながら彼女が顔を上げる。

ぞくり、急に全身に鳥肌が立った。な、何なんだ？

「召喚しておいて無視する、普通？ 魔王なのよ、私っ！」

「あーはーはー、ドツキリはもういいから。僕の友達なんだろ？」

そう言つと、僕が不思議そうな顔をした。

「初対面の人だけど？」

「はい？ 僕さん、今なんと仰いましたか？」

「わたくしの知り合いでもありませんよ？」

そう言つたのは荷物を取つてきた恵美ちゃん。

「え、じゃあ……誰？」

「だから魔王シリだつて言つてんでしょうがつ！」

「ははは、冗談の上手い子だ。

「とりあえずは110番か」

「さり気に入審者扱いするな！」

自称魔王が不審じやなくて何が不審なんだよ。

「てか、あんた！ 私が魔王だつて信じてないでしょ」

「まあ、この時代にんなもんいる訳無いしな」

「魔王にしては思つたよりインパクトに欠けますし」

「ぶっちゃけて言つと飽きたからどうでもいい」

笑顔でサラリと酷い事をいう恵美ちゃんと、あまりにも無責任な

僕に自称魔王は啞然。

「……………あたしが魔王だつて認めないの？」

そんなの決まってるだろ？が。俺は神話は好きだが、物語として好きなのだ。

「もちろん認めたくない。今の世は科学の時代……魔王など認めんわ！」

フツ……俺は幽霊やコトの類も信じていない。だつていたら口ワイからな。

「……いいわ、魔王のインパクトを見せ付けて証明してあげましょう！」

あ、何気に恵美ちゃんの言葉グサリと来てたんだな。

彼女は不適に笑うと、踊るように両手を動かし始めた。なにやつてんだ？

「四元素の一つ、炎の力よ……今我が手に宿り、劫火の剣となれ！」

自称魔王の手から火が吹き出したかと思うと、それは波打つ刀身を持つ美しい剣へ変わっていた。途端に上がる俺と恵美ちゃんの歓声。

「どう？ これが先代が手に入れた神剣『レーグアテイン』よ！」

自称魔王はそう言つて彼女はそれを得意気に掲げて見せた。

……どうコメントしていいのやら？

「へえ……どうやったの、どう種があるの？ つて、言つたり台無しだよな」

「マジックじゃない！ ビンしてそこまであたしを否定したがるわけ！？」

強情な俺に涙目になり始めた自称魔王だが、そんな事には屈しない。……なぜかって？ ふん、そんなの怖いからに決まっている！

自分と違う者を恐れて拒むのは人間の性だ！

とは言いつつも、心のどこかで認め始めている自分が居る。ただ、受け入れたが最後、もう今までの日常には帰れない気がして……それが怖い。

「兄さんの捻くれ者。ここまで見せられたんだから、そろそろ認め

なさいよ」

「うるさい、きつとあれはプラスチックかなんかの玩具。本物じゃない……と、信じたい」

うわっ、少し口調が弱気になつてしまつた。今までなら断言できたのに！

テレビの超能力者も、UFOの特番も、心霊写真も全ては番組の作り話だと一蹴できた。なのに、実物を見せられるといつまでも動搖してしまうものなのか。

「うう……それなら、これでどうよ…」

魔王はそれを手に持つた剣を一閃した。お、おいつ、んなもん家で振り回すな！

「うう、と言つ音とともに切つ先から炎が噴出した。炎は自由に部屋を翔け回り、床の一部と壁を焦がしながら蠅燭に火をともした。い、家が燃えるっ！」

「ちょ、ちょっと兄さん、兄さんが認めないからキレたじゃない！早く止めてよ…」

能天氣な偉も、流石にビビリ始めた。恵美ちゃんは恐怖で絶句している。

「わ、分かつた、お前が本物の魔王だつて認める！だから火を止める火をつ！」

「ばちん。魔王が指を鳴らすと、荒れ狂つていた炎が嘘のように消え、剣も消滅した。

「ふん、初めからそつ言えばいいじゃない。……や、あたしを呼び出したからには理由があるんでしょ？ サッセと言いなさいよ、願い事」

炎が消えてホッとしている俺に、魔王はそう言つてきた。願いはいいから、とにかく帰つて欲しいというのが本音だが、それを言つと何かまたキレそうで怖い。

「願い……ね。俺はこれといって特になないな。つていうか、俺が呼び出したんじやないし。願いを聞くなら偉だろ？ サッセと叶えて

貰つてくれ。なんかあるんだろ?」

そしてさつさと帰つてもらつてくれ。

「いや、別に?」

じゃあ何で呼んだんだよ。

「ちょっと面白そだつたからやつてみただけ。恵美何がある?」「わたくしも特に無いですね」

……そうだった、この子社長の娘だし大概の物は手に入るんだ。どうしたものかね?

願いをかなえて貰つたりしたら、魂の一つや一つは持つていかれそうで怖い。

出来れば大人しく帰つて欲しい……つて、何ですかその形相は!?

「……あんたたち、願いもないのにあたしをこんな所に呼び出したわけ?」

「ま、まあ、そう言う事になる……かな」

ヤバイ、さつきの威圧感が戻つてきた。今刺激したらマジで殺されそうだ!

「冗談じゃないわよ! せっかく初仕事で来たつてのに、代価の一つも持たずに帰つたらベリアルにまた馬鹿にされるじゃない!」

「……ほつ、助かった。あのままじゃ何しでかすか分からん。

「……そう? なら、あなたが死んだ後に貰いに行くわね。うつしや、これであいつに馬鹿にされなくて済むわ。ありがとね!」

魔王はそう言うと晴れやかに笑つた。笑顔は結構可愛いな。

……つてか、今持つて帰るんじゃないのか?

「うわ、兄さん度胸あるわね。魂をほいほいと差し出すなんて」

……へ? た、魂つて!?

「じゃあ、この契約書にサインしてちょうだい。これ書いてくれたらあたしもう帰るから」

差し出された紙を見てみる。“契約・私は願いの対価として魂を差し出す事を誓います”……な、なんだって！？

「い、今の無しつ！ 魂なんて差し出せるかつ！」

やべえ、後一步で死後の安らぎがなくなる所だった……。死後なんて信じてないけど。

「ちょっと！ 魂の一つや二つドグダグダ言つてんじゃないわよ！ 男でしょ？」

「む、無茶苦茶言いやがる……。ってか、魂がどうのこうのって性別は関係ねえだろ？ 温厚な俺も、さすがにこめかみ辺りが痙攣し始めた。

「……お前なあ、いい加減にしろ。魂なんて簡単に渡せるか！ 帰れ、今すぐ帰れっ！」

これ以上関わってたら、冗談抜きで魂取られそうだ。

「……つ！ もういいわ、帰る、帰つてやる！ だあれが好き好んでこんな所に留まるもんですか！ もう一度呼んだって一度と来てやらないからね！」

怒りが攻撃に転じなかつた事にホツと一息つきたいが、帰るまでは油断できない。

「…………どうした、早く帰れよ」

所が魔王はなかなか帰る気配が無い。何かそわそわしている。

突然、魔王は顔を赤らめて俺をみた。

「 あたしを呼び出した時の魔術書出して。それに送還の魔方陣書いてるはずだから」

魔術書？ ああ、あの胡散臭い本か。あの本どこやつたっけ？

「兄さん、何か焦げ臭くない？」

僕が鼻をひく付かせながらそう言つ。……そりいえば焦げた臭いが漂つてきてる。

「え？ ……あつ！」

燃えていた。結構激しく燃えていた。あの怪しげな本が。多分剣を振り回したときに飛び散った炎が燃え移ったんだな。

「あ、あ、あ……！」

顔面蒼白になつた彼女は慌てて本に飛びつき、虚空から水を出して消化した。

「あー、ほとんど炭化しちやつてますね。でもいいですよ、もういらないですし」

朗らかに恵美ちゃんがそう言つと、少女は本を抱えてうずくまつた。

「……れない」

「へ？」

声が小さすぎて聞き取れなかつた。

「帰れないっ！」「これが無いと私魔界に帰れないの……？」

え？

「えええええっ！自分で帰れないのか？」

俺がそう言つと、彼女は泣きながら頭を振つた。

「面倒くさいから興味のある攻撃系や鍊金系の術以外まじめに勉強してなかつたの！」

「じゃあしばらく泊まつてけば？」

勝手に決めんなよ偉ツ！

そうして、我が家に奇妙な居候が転がり込んできたのであつた。

果たして、彼女は帰ることが出来るのだろうか。

「どうでもいいけど、兄さん晩御飯まだ？」

「……黙れマジで」

(後書き)

気が向いたら、続きを書くかもしれない。
が、予定は未定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125d/>

まおうが家にやって来た！

2010年10月8日15時37分発行